

TANKYU NEWS



トビタテ!
留学JAPAN
Challenge Connect Co-create

6
June

**MATSUMOTO
AGATAGAOKA
Senior High School**



発行 探究学習推進室
〒390-8543 松本市県2-1-1
松本県ヶ丘高校 TEL 0263-321142

文部科学省による官民協働海外留学支援制度、「トビタテ!留学JAPAN」の「新・日本代表プログラム」に今年度、縣陵から一挙3名が採用された。県内からは15名が採用。そのうちひとつの公立高校からの採用数としては、ダントツのトップとなる。3人はそれぞれオーストラリアやフランスを2週間~1年留学する。



事前研修会で教わった「トビタテポーズ」の花村さん、金子さん、田邊さん

縣陵生、 「日本代表」になる。

今年度 一挙3名「トビタテ」で海外へ

今回、「新・日本代表」に選ばれたのは、金子泰雅さん(2B)、田邊彩花さん(2B)、花村怜海さん(2B)。いずれも探究科の生徒だ。

金子さんは来年3月中旬からの2週間、オーストラリア・ブリスベンへの短期留学を企画。約30万円の助成を受ける。田邊さんは今年10月中旬からの3週間、フランスへ留学する。助成は約16万円。花村さんは早速7月10日からオーストラリア・ブリスベンの高校へ1年間留学する。月に15万円助成を受ける予定だ。

このプログラムの場合、いわゆる「語学留学」では通らない。設定された募集枠は、「マイ探究コース」「社会探究コース」「スポーツ・芸術探究コース」の3つとなっており、「探究」がキーワードとなる。いかに自分ごととして「探究」したいテーマを持ち、それをエントリーシートに表現し、プレゼンするか。周到な準備と情熱とが必要だが、周囲の協力を得ながらのエントリー活動に3人は「応募するだけでも大きな勉強になる」と口を揃えた。

(裏面へ)

トビタテ留学 JAPAN

新・日本代表プログラムとは

より若い時期からの海外経験を将来の留学につなげるため、高校段階からの留学の機運醸成・支援を行う、文部科学省のプログラム。

2014年度より実施してきた「日本代表プログラム」の基本理念やコミュニティを受け継ぎつつ、より発展的に進化した事業として、将来、「社会にイノベーションを起こすグローバル探究リーダー」として日本の未来を創る人材を育成するとしている。

第8期生(2023年度)の募集は2023年2月に開始し、4月下旬に締め切った。高校生では全国から919校2238人の応募があり、そのうち443校708人が採用された。

1期から7期までの間、本校では4名が採用されている。コロナ・パンデミック下では、採用されたものの、オンライン留学への切り替えを余儀なくされたこともあった。

介護福祉のありかた考えたい — 金子さん

金子さんは、ご家族が働く介護福祉施設の状況を見聞きし、日本の介護福祉のありかたに興味を持つ。今回の留学では、オーストラリア・ブリスベンの語学学校を拠点に、午前中は語学研修、午後は福祉施設でのボランティア研修を予定している。ホストファミリーにも、高齢者のいるお宅をお願いした。

日本は長寿国ではあるが、高齢者のQOLは高いとは言えないのではないかと。そんな疑問を抱きながら、豪州と日本との福祉への考え方や方法論の違いを学び、日本に持ち帰りたいという。また、福祉政策のありかたにも興味を持つ。

福祉といえば北欧というイメージがあるが、英語の通じやすい豪州を選んだのも、探究テーマに没頭するためだ。現在英語に不安がないわけではないが、事前研修で友人におそわった英語の鍛え方を参考に、アプリなどで英会話を特訓し、出発する3月に間に合わせる。

サッカー部に所属する金子さんは、部活動と応募書類の準備や面接準備との両立にとても苦労したという。しかし、両親からの、「大人になってからでは難しい挑戦もある」という言葉を胸に、「このチャンスを逃せば取り返せない」という思いで踏ん張った。



金子 泰雅さん (2-B)

「トビタテ」の日本代表には「エバンジェリスト(伝道師)」としての使命も課される。戻ってきたら「留学という経験を多くの高校生に伝える」と意気込んだ。

フランスの「食」を「生産面」から — 田邊さん

2014年にスーパーマーケットの食品廃棄を禁止する法律を制定したフランスは、「フードロス対策」の最先端国とも言われる。食文化の国としても知られるフランスだが、日本の「もったいない」文化とはまた違った「食」への美意識があるのではないかと。そんな問題意識もあり、田邊さんはフランスの「都市農業」に着目。市民文化と食料生産の結びつきを肌で探究する。

10月中旬からの3週間、フランス・パリの語学学校を拠点に、「都市農園(NATURE URBAINE)」を訪ねたり、「みんなの冷蔵庫」の考え方を学んだりする。

1年次の探究学習では、薄川に生息する外来種「アメリカセンダングサ」を扱った。植物が好きで、ハイドロポニックスを活用したパリの垂直農業にも興味をもった。フランスの都市農園ではビルの屋上で収穫された野菜がその建物のレストランで提供されるという。無駄のない「食」のエコシステムから学ぶことは多い。

今回のチャレンジについて、「挑戦すること自体に価値があった」という。高いハードルだったが、家族はいつも自分のやりたいことを尊重してくれた。もし日本代表に選ばれなかったとしても、一



田邊 彩花さん (2-B)

流企業の人事の方との面接など、すでに普通には経験できなかったことばかり。だから、「トビタテは挑戦の意義を実感できるプロジェクト」だと語った。

野生動物との共生探る1年間 — 花村さん

家庭でペットとして飼っていた犬が病気になった時、助けてくれた獣医師という仕事にあこがれていた。いつしかそれは「人間」と「動物」との共生社会の実現へと興味が広がり、今回、豪州における野生動物保護活動などを学ぶ。

1年間の留学ではブリスベンの高校に在籍し、通常の授業をこなしながら、環境・野生動物保護団体のボランティアなどに従事する。その探究活動費に充てるため、「トビタテ」から月15万円の奨学金を得た。毎月日本へ活動成果を報告することになっている。

「日本の動物園や水族館は、まだまだ

見せて楽しんでもらうという要素が大きいのと思いますが、オーストラリアのそれは生物を学習するためのものだという面が大きいと聞きました」と話す彼女は、以前、山火事で犠牲になった野生動物の現状をメディアで目にし、心を痛めた。人間の社会活動によって、動物が犠牲になる現状に、どう立ち向かってゆくか。自然をリスペクトする豪州で人間と自然との関係の根本的な考え方を学びたいという。

本校出身で現在大学2年生の花村さんのお姉さんも、海外へのチャレンジに積極的だ。そんな気質を受け継いでか、「



花村 怜海さん (2-B)

迷うことがあっても、行動すれば必ず得られるものがある」との信念をもつ。縣陵生がさらに留学に挑戦できるよう、自らの行動を多くの人に伝えるつもりだ。

今回はたまたま採用になった3人を紹介したが、落選してしまった縣陵生もいる。しかし、挑戦することそのものに「価値」があることは明らかだ。今回勇気をもって「トビタテ」に挑戦したすべての縣陵生に敬意を表したい。そして、もし留学に限らず自分の世界を広げることに迷っている縣陵生がいるなら、挑戦する力と勇気とを3人から分けてもらおう。彼らの勇気は、同じ縣陵生として、同じ高校生として、あたたかく「あなた」の背中を押してくれるはずだ。

挑戦する力を 分けてもらおう